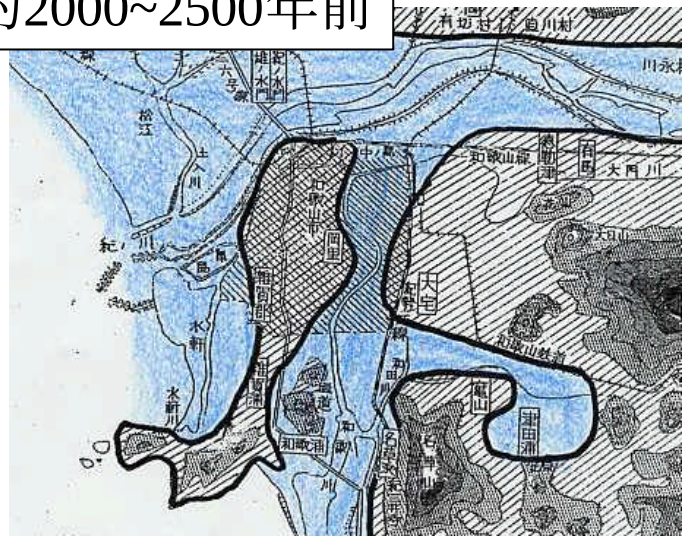
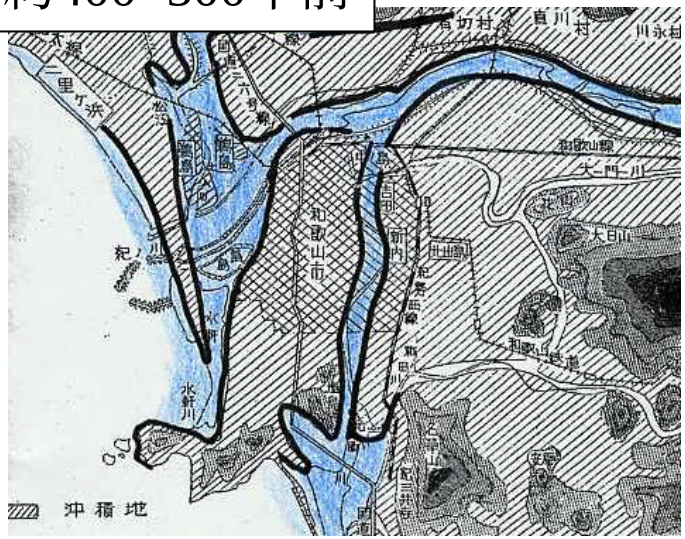
紀の川下流部の変遷

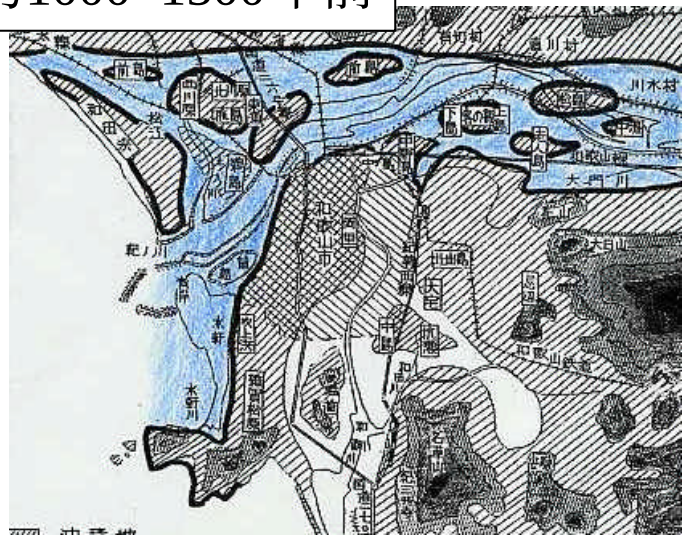
①約2000~2500年前



③約400~500年前



②約1000~1500年前



④現　代

紀の川の災害史　昭和以前の記録に残る主な災害

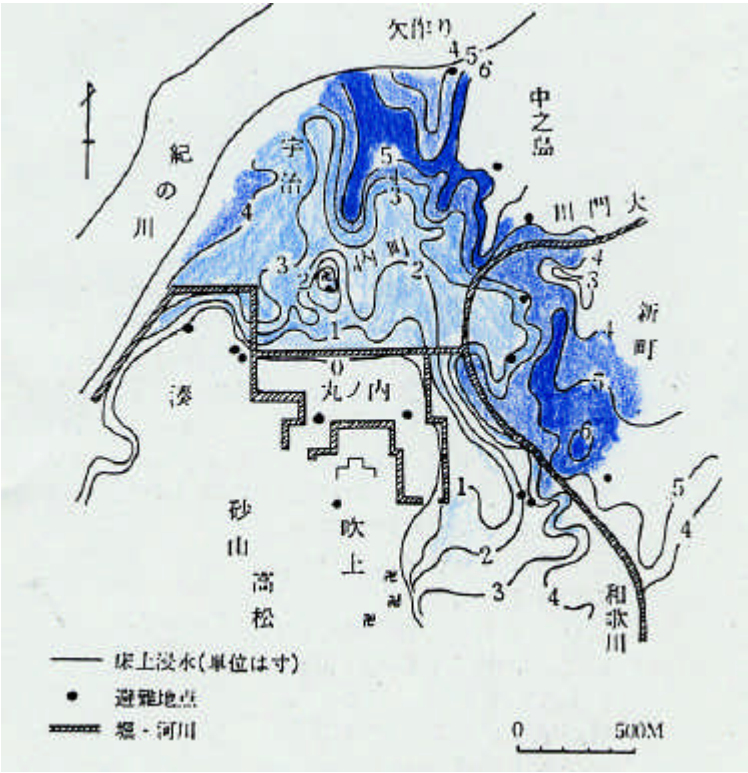
（出典：和歌山県災害史）

701年（大宝元年８月）
続日本紀に紀伊ノ国の被害について記録。

1756年（宝暦６年10月）
紀の川が増水し、城下の人家の浸水が5.6尺（約1.7m）にも達した。

1889年（明治22年８月）
東は那賀地方、南は紀三井寺まで高地を残してほとんどの地域が浸水。和歌山県下の被害は死者1,247人、流出家屋3,675戸、浸水家屋33,081戸と史上空前の大洪水であった。(右図)

1912年（大正元年９月）
台風により和歌山県域で死者17名、全潰家屋84戸の被害。



紀の川治水史

紀の川の治水事業が本格的に着手～徳川時代以降

徳川時代の治水工事　初代藩主　頼宣時代の築堤

・柳堤（現和歌山市）
嘉家作付近から地蔵の辻付近まで洪水防御、城郭防衛を兼ね新堤を築造。堤防両側に柳が植えてあったことから命名。

・松原堤（現和歌山市）
堤防の両側に松並木を植え、洪水の流入を防いだと伝えられている。

・千間堤（現かつらぎ町）
天端幅3m、長さ350mにわたって築堤